

企 画 名:国際会議”Post-Neonics, What Next?”の開催とライブ配信

団 体 名:IUCN 浸透性殺虫剤タスクフォース

1. 報告要旨

2016年6月18日、東京、新宿区の早稲田大学理工学部西早稲田キャンパスでネオニコチノイド系殺虫剤(ネオニコ)に関する国際会議”Post-Neonics, What Next?(これからどうする?浸透性殺虫剤国際シンポジウム)”を、東京女子医科大学の平久美子を世話人として開催しました。EUとアジア、オーストラリアの第一線の学者14人が、主にアジアにおける浸透性殺虫剤の生態系及び人体に与える影響とその対策について意見交換を行いました。

会議は金沢大学の山田敏郎名誉教授の歓迎の辞から始まり、第一部は、ネオニコ研究最前線として、北海道大学の池中良徳氏、ハワイの藤岡一俊氏、神戸大学の星信彦氏がそれぞれの毒性についての最新の知見を紹介し、第二部は、浸透性殺虫剤についての科学的知見として、浸透性殺虫剤タスクフォースの委員長ベイレフェルト氏と同副委員長ボンマタン氏が世界的な統合評価書への取り組み、オーストラリアのサンチェス=バヨ氏が水生環境中の浸透性農薬の生態影響、国立環境研究所の五箇氏が日本の浸透性殺虫剤の生態リスク評価の取り組み、東京女子医大の平がネオニコの健康影響、国立環境研究所の前川氏がネオニコの神経発達影響について自身の原著論文の内容を紹介しました。さらに第三部では、欧州アカデミー科学諮問委員会のノートン氏が同委員会による独自の浸透性殺虫剤の生態リスク評価、イタリアのフルラン氏がネオニコの代替案としてのIPMと互助保険による生産者保護、フィリピンのハイツマン氏がフィリピンでの浸透性殺虫剤の使用実態、中国のヒョン氏が環境工学の実践例としてのネオニコなしのコメづくりの成功例、群馬県渋川市の坂本氏が有機リンとネオニコを使わない農業の実践についてそれぞれ発表し、アジアでネオニコが大量に使われていて生態影響及び健康影響が懸念されること、気温の高いアジアでもネオニコなしでの農業の成功例がたくさんあることが紹介されました。

会議は公開で、一般の傍聴や質問、コメントも受け付け、地域での深刻な生態影響や健康影響の訴えもあり、政府の取り組みを促していく機運があることが報告されました。会議の様子は日本語同時通訳付きでライブ配信され、会議終了後ウェブアーカイブとして一部公開しました。抄録プログラムは和文と英文を併記し公開しました。浸透性殺虫剤の特性と影響を表現したポスターを作り会場に掲示しました。

2. 成果物

1. チラシ案内図
2. [抄録プログラム](#)
3. ポスター
4. アーカイブ動画 ([第2部](#)及び[第3部](#)のうち、公開可能な発表)